在校生 学生から看護師へ

３０代の看護学生

21回生　辻　明日香

５歳の娘が「わたしもお勉強するね」と言い、隣で自由帳を広げるようになったのは２年生の秋でした。母親という役目を担いながら看護学生を続けられたのは、そんな優しい娘の力があったからだと思います。

実習中の記録は娘を寝かしつけてから始まる事が多く、一緒に寝てしまう事も度々あるため、携帯のアラームは深夜１時から３０分置きに鳴り続け、重たい身体を奮い立たせていました。家族には「実習中宣言」を行ない、家事の手抜きを受容してもらいながら乗り越えました。休みの日にも課題をする母親の姿に、きっと娘も我慢があったと思います。それでも勉強をする事に対して嫌悪感ではなく「私もしたい」と良い印象を持ってくれて、今では私が何もしていないと「勉強してください」と言われるまでに成長しました。

３０代で看護学生となり、入学当初はどんな日々になるのか見当もつきませんでしたが、まさか歳の離れた同級生と就職後も集まる約束ができるとは想像していませんでした。

２１回生は社会人学生と現役生の仲が良く、年齢の壁を感じず、多くの刺激をもらいました。周囲からは家庭と勉強の両立なんて大変と言われていましたが、想像だけで諦めていたらこの

２１回生との出会いが無かったと思うと、挑戦した当時の自分を褒めたいと思います。

実習で受け持ちさせていただいた終末期の患者さんの「最後にあなたに会えて良かった」の言葉が心に残っています。苦痛に対し手を握り、傍にいる事しか出来なかった私に対し、強く手を握り返しながら言葉を紡いでくれました。入学前は多分簡単に考えていた“寄り添う”という行為は、実際に行動すると容易ではない事を痛感しました。それと同時に、患者さんにとって心の拠り所になれるような看護師になりたいと強く決意しました。

先生方や指導者さんから熱い指導や助言を頂き、学ぶという行為が習慣化し知識を得る事に充実感が生まれました。臨床に出てからもその習慣を大切にし、自己研鑽に励みたいと思います。そして勉強好きになった娘が看護師という職業も好きになってくれるように、輝く姿をみせていきたいです。

編集後記

松阪看護専門学校同窓会「松看会」会報　第１号を発行するにあたり、原稿をお寄せいただきました皆様に心より御礼申し上げます。
卒業生の方々が地域でご活躍されている様子に触れとても嬉しく思います。
今後、「松看会」がますます発展していかれますよう、皆様のご意見、ご投稿をお待ちしております。
同窓会のホームページを開設しておりますので是非ご覧ください。
また住所、勤務先を変更されます方はご連絡をお願いいたします。

（事務局　宮嵜尚子　本校事務職員）

松阪看護専門学校同窓会「松看会」会報 第１号　　発行日 令和５年３月１１日　　発行 松阪看護専門学校同窓会事務局

MATSUSAKA SPECIALITY SCHOOL OF NURSING
松阪看護専門学校 同窓会

松看会

会報誌
vol.1
2023.3

新役員　会長挨拶

松看会会員の皆様におかれましては、ますますのご清栄、ご活躍のこととお慶び申し上げます。

この度、令和4年3月11日の松看会同窓会総会にて令和5年度から令和8年度までの4年間同窓会会長の任を拝命致しました一志麻奈斗（9回生）です。

私は令和元年度より評議員として松看会の活動に参画して参りました。その中で学校や地域との繋がりの大切さを実感した次第です。その繋がりを意識し、令和5年度より会長として新役員・評議員と共に活動に参画していく所存であります。

昨今は新型コロナウイルス感染症という、未曽有の恐怖の中で業務に邁進されていることと思います。人との接触が憚れる中ではありますが、地域並びに同窓生間でのネットワークを活用し、役員一同同窓会の発展に尽力していきますので、引き続き松看会の活動に御協力を頂けますと幸いです。どうぞ宜しくお願いいたします。

会長　一志　麻奈斗

松看会会長退任ご挨拶

会長　大森　隼一郎

弥生の候、松看会会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

令和元年８月２４日に開催されました総会において選任をいただき、令和元年度から令和４年度までの４年間、松看会会長を務めさせていただきました大森（８回生）です。

さて、このたび、去る3月11日に開催されました総会で選任されました一志新会長（9回生）に、今後の松看会の運営・活動を託すことになりました。

松看会は、会員相互の親睦と社会の保健の普及・向上をはかるとともに、母校の充実・発展に寄与することを目的に運営されています。

私が会長として、4年間務めることができたのは、役員や評議員、同窓生の皆様、学校長をはじめ教務・事務の方々のご協力・ご指導があったからこそと、心から感謝を申し上げる次第でございます。会長として諸先生方・在校生の皆様と関わる中で、本当に学ぶ事も多く、貴重な経験もさせていただいたと思っております。本当にありがとうございました。

長らく会長を務めさせていただきましたが、今後のさらなる同窓会としての主体的な活動という点で、より若い世代の会長に引き継ぐことにより、ますますの活性化を期待することとしました。今後は新会長の下で、役員会等の運営が成され、より良い同窓会となる事を信じ願っております。私も、微力ながら協力していく所存であります。

あらためまして、会員の皆様におかれましては、益々のご健勝、ご発展を祈念するとともに、今後の同窓会活動に対してのご理解ご協力の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。これまでの数々のご支援ありがとうございました。

最後に、「地域住民の健康と安全を守るために、人を大切にする心と考える力のある看護実践者を育成する」を理念に、令和元年に開学20周年を迎えた松阪看護専門学校と、今や会員数700名を超える松看会のさらなる飛躍・飛翔を願って、会長退任の挨拶とさせていただきます。

学校長ご挨拶

同窓会報第１号に寄せて

学校長　平岡　直人

萌芽の候、松看会の会員の皆様におかれましては、ご健勝のこととお喜び申し上げます。

平成12年4月に松阪市鎌田町に開学した我が松阪看護専門学校も令和元年4月に創立20周年を迎え、多くの卒業生の集う中、記念行事として日本赤十字看護大学名誉教授、川島みどり先生をお招きして御講演を賜り、同窓会も盛大に開催されました。

さて、東欧ではナイチンゲールが活躍した地でまたしても戦争が勃発していますが他人事とは言えません。今から遡ること85年前の昭和13年、第二次世界大戦の開戦を目前に、日本でも国家総動員法が4月1日に公布された直後、4月8日に本校の前身である松阪地区医師会附属看護婦護学校は29名の生徒を迎えて開校されました。
そして、准看護婦制の採用に伴い本校は昭和34年に松阪地区医師会附属准看護学校と改称します。当時の生徒達は診療の補助として働きながら学校に通われる方が何人もみえました。そして寮や診療所併設の部屋に住み込みで働きながら学ぶ生徒も珍しくはありませんでした。私事になりますが、小生の母も、彼女たちの親代わりとして生活面にも関わることもあり、習い事を教えたり頑張った時にはお小遣いを出したりし、一人一人を大切に育てていたと記憶しています。当時は開業医も少なく、遠方への往診や夜間の急患患者への対応も必要とされましたが、一緒に生活する看護師さん達のお陰で、それが可能な時代でもありました。

時が進み大病院志向が強くなり医療の中心も変遷すると、卒業生の働く場も一般診療所を目指したものでは無くなりました。そして、大正2年に建設された白粉町の医師会館内に開設されていた准看護学校は、時代の要求、地域医療の更なる発展のため、平成12年に現在の姿に昇格し生まれ変わったのです。

更に時代が変わり超高齢化の時代になると、「地域包括ケア」という言葉の下、地域医療の目指すところが在宅医療も視野に入れたものとなってきました。これからの時代は、医師にとってはかかりつけ医の役割がますます重要なものとなり、訪問看護をはじめとする多職種の方々との連携・共同の下で力を結集し地域医療を支えなければなりません。

令和2年3月にWHOよりパンデミック宣言された新型コロナウイルス感染症が未だ収束しない中、松看会の皆様はいかがお過ごしでしょうか。感染症の影響は確実に皆様の現場に大きな影響を与え、更には私生活までもが制限されるものになったこと御推察します。一方、現役を退かれてみえる方々におかれても、ワクチン接種など現場の人手不足が叫ばれる中、復帰を考えられた方もみえたかと思います。ご家族がご高齢になられ、その介護を担ってみえる方もあるでしょう。皆さんはこの世界で欠くことのできない存在の方々なのです。

同窓会「松看会」は同じ学校を卒業した方々の集う場である一方、今を様々な形で活躍してみえる皆様の応援団でもあります。すべての卒業生が、資格と責任の両方を併せ持って苦悩する方の中でも、生き生きと頑張っていかれることを願っています。働き方には多種多様なものがあると承知しています。どのような形でも、是非、この地区で活躍を続けて頂きたいと思います。時には道に迷ったり、行き詰ったり、元気がなくなったりすることもあるかもしれません。そのような時には皆さんの母校を頼ってください。お一人お一人のお話を拝聴させて頂く準備があります。松看会を通して、本校、松阪地区医師会が皆様の心の拠り所の一つとなれれば幸いです。

今後の本校の発展とともに、「松看会」の皆様、また前身である松阪地区医師会附属准看護学校ご卒業の諸先輩方々の益々のご活躍とご多幸をお祈りしまして、お祝いの言葉とさせて頂きます。

令和5年1月吉日

「天使とは、美しい花をまき散らす者でなく、苦悩する者のために戦う者である。」（フローレンス・ナイチンゲール）

副学校長ご挨拶

同窓会に思うこと

副学校長　西　　泉

会員の皆様におかれましてはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。皆さまには日頃からご支援をいただきまして心から感謝申し上げます。

2018年度から副学校長として着任し、今年で5年目となります。着任直後に創立20周年という節目を迎え、学校と同窓会との協賛で川嶋みどり氏の記念講演会を行うことができました。それまで活動が無かった同窓会が組織化され、大森同窓会会長をはじめ、役員や評議員の方々のご尽力により、ＨＰの充実、・学校行事への参加・イベント活動の実施・学生への同窓会の説明・定期的な役員会の活動などが行えるまでになりました。2023年3月には、4年に1度の同窓会総会と初の同窓会誌発刊となります。

同窓会の主たる目的は会員相互の親睦と社会の保健思想の普及・向上を図ることに加え、母校の充実・発展に貢献することを目指す最強のサポーターであることです。この支えは学校にとってなくてはならないものです。最近ではコロナ禍のため、思うようには動くことのできない不自由な日々が続いていますが、この活動は今後も継続して行っていただきたいと願います。

実習などで松阪地区の実習施設でご活躍される卒業生に会う機会が多くあります。沢山の卒業生が実習指導者となり、学生に指導をしていただいております。また、専門性を高めて認定看護師や管理者になられた方も沢山おられます。働く場所も病院に留まらず、クリニック、訪問看護ステーション、老健施設など松阪地区の様々な場所でお世話になっています。更に、学生への授業にも講師として来ていただいたり、学内で看護教員として教育に携わるなど、卒業生が母校を支えている力強さを実感しています。

松阪看護専門学校での3年間は「基礎看護学」の学びであり、そこに植えた種を今後どのように花開かせるか、卒業した後も私たち学校職員はずっと見守り続けたいと思っています。道に迷った時にはぜひ学校を頼ってください。迷っていなくても、学校に立ち寄って元気な姿を見せてください。職員一同お待ちしております。

教員代表ご挨拶

卒業生のみなさんへ

専任教員　橋本　泉

私の教員生活は松阪看護専門学校開校の時から始まっており今、23年目を迎えています。初めて授業をした時の事は今でもはっきりと覚えています。目の前にいる学生の顔を見ることができず、自分のノートをひたすら読んでいるといった感じでした。緊張でどんどん話すスピードが早くなり、学生の手が速記者のように忙しく動いている様子が目には映っていましたが、コントロール不能な状態でした。とうとう限界がきた学生が、軌道修正できない私に「先生、早すぎて何を言っているのか分かりません。」と勇気を出して言ってくれました。今となってはほろ苦く懐かしい思い出です。新米教員のつたない授業に必死についてきてくれた当時の学生たちに感謝の気持ちでいっぱいです。

卒業生の病院での活躍の様子を度々耳にし、嬉しく感じています。そして、最近は訪問看護ステーションや地域包括支援センターなど地域で活躍している卒業生の話も耳にするようになりました。在宅看護論を担当している私には特にこのように地域で頑張っている卒業生の話を聞くと嬉しさひとしおです。「病院で経験を積んでいつかは訪問看護師になりたい」と言って卒業していった学生の姿が思い出されます。多くのキャリアを積んで、自分の意思を貫き訪問看護に携わっていると思うと何だか私まで誇らしい気持ちになります。看護学生時代の授業や実習で蒔いた種がこちらの方面でもたくさん咲いてもらえたらいいなと思います。

あと2年で教員生活25年となり年齢的にも節目を迎えます。残念ながらまだまだ「パーフェクト！」「100％OK!!」という納得のいく授業の域には達していません。歳を重ねるにつれ頭の回転や滑舌が悪くなっています。ですが、私のモットーである「人間は生涯、成長・発達し続ける」ということを心の支えにしながらもう少し頑張りたいと思っています。卒業生のみなさんも家庭や職場などそれぞれのところで頑張っておられることと思います。みなさんのご健康とご活躍を心よりお祈りしています。またどこかで見かけたら声をかけてくださいね。

松阪看護専門学校 同窓会「松看会」役員名簿

（令和元年度～令和４年度）

	回　生	名　前
会　長	8 回生	大森　隼一郎
副会長		中谷　由香
書　記	6 回生	世古　啓泰
		松本　早織
会　計	7 回生	粕谷　友香
		水谷　真央
会計監査	5 回生	糸島　瑞穂
		酒井　昌美

松阪看護専門学校 同窓会「松看会」役員名簿

（令和5年度～令和8年度）

	回　生	名　前
会　長	9 回生	一志　麻奈斗
副会長		浦野　顕
書　記	11 回生	今西　未来
		伊藤　隆伸
会　計	10 回生	瀬古　翔也
		結城　宏美
会計監査	12 回生	辻井　大樹
		森下　千尋

松阪看護専門学校 同窓会「松看会」評議員名簿

（令和5年度～）

回　生	名　前	回　生	名　前	回　生	名　前
1 回生	北川　早織	8 回生	浦川　陽子	16 回生	辻　晴香
2 回生	今井　妙子	9 回生	谷口　つかさ	17 回生	横田　祐樹
2 回生	川口　珠希	10 回生	奥野　早織	17 回生	吉田　奈央
3 回生	城所　美穂	11 回生	宮原　朱音	18 回生	田中　芹奈
4 回生	伊藤　真央	12 回生	北村　甚成	19 回生	西尾　友梨恵
5 回生	上原　里香	13 回生	仲野　真央	19 回生	山本　亜美
6 回生	井上　千彰	14 回生	荒木　俊貴	20 回生	中世古　星奈
7 回生	舟戸　瑞輝	15 回生	真川　卓也	21 回生	辻　明日香

R5.3.3現在

卒業生のいま。そしてこれから。

競り子だった私

イワサ小児科勤務　５回生　上原里香

私は25年前、木材会社で“日本初の女性の競り子”として働いていました。コンピューターの専門学校を卒業し事務職をしていましたが、社長から「声が大きいので競り子をしてみては？」と提案され、男性の中で一人フォークリフトに乗り、木材を担ぎ、営業をしていました。そんな私が看護師を目指そうと思ったきっかけは、第一子出産の時でした。難産でしたがその時の看護師さんの声掛けやそっと気持ちに寄り添ってくださった姿に救われました。言葉掛けひとつで、こんなにも人は頑張ることができるのだと実感し、そんな看護師になりたいと思ったのです。その気持ちや想いは第二子出産後もさらに強くなり、B型で我が道を行く一直線の私を誰も止める事はできず、子供達が保育園入園と同時に地元で通いやすい本校へ入学しました。今まで勉強という勉強をせずに過ごしてきた私にとって、看護学校は試練の道でした。それでも頑張れたのは家族の支えはもちろんのこと、何があっても負けずに看護師になる！という強い意志があったからです。

卒業後はイワサ小児科に就職し今もお世話になっています。私は夜勤経験もなく難しい技術ができるわけでもありませんが、クリニックでしか経験できないことも沢山あると思っています。子供の成長や元気になっていく姿を見守ることができ、「子供が大好き」な私にとって毎日がとても充実しています。また、ここは三重県産の檜材で建てられており、木のぬくもりと温かみを感じる事ができます。以前に木材を競り売りしてきた私にとって、何か縁を感じる不思議な場所であり、心が和む場所でもあります。だからこそ笑顔を大切にして看護をするという私の看護観もずっと変わることはありません。

私は人生で全く違う２つの職種に就きその中で笑いも涙も沢山経験しました。どの道が正しいのかは誰にも分かりませんが、何かに挑戦することを迷っている人がいるのなら、遅すぎることはないと私は伝えたいです。
最後に、これからもいろんなことに挑戦し失敗しては前に進み、成長していきたいと思います。

“その人らしさ”を大切に看護を実践する

厚生連松阪中央総合病院勤務　８回生　山本成美

看護師になり12 年が経ちました。これまで小児科・泌尿器科の混合病棟、脳神経内科病棟、新型ロナウイルス感染症病棟、脳神経外科病棟に勤務し、現在は入院支援センターで勤務しています。

これまでに多くの患者さんと関わり、多忙な業務の中で患者さんの声に耳を傾けることを大切に看護してきました。その中で心電図検定や心不全療養指導士など興味のある分野には積極的に挑戦してきました。また、院内のBLS（一次救命処置）チームに8年間所属し、三重県内の専門学校へインストラクターとして出向いたり、院内研修の講師としても活動してきました。

そんな私が今一番興味を持っている分野は、認知症看護です。高齢社会により認知症を持つ患者さんが増え、病院でも関わる機会が多くなっています。認知症を持つ患者さんの“もてる力”に着目しその人らしさを大切に看護を行い、そして退院後もご家族と、または施設で安心して生活できるように、退院後の生活を見据えた看護を考え実践してきました。今まで以上に認知症を持つ方やそのご家族をサポートするために、今は認知症ケア指導管理士の資格の取得に向け研修への参加や資格試験の勉強など、日々頑張っています。

ここ3年間は新型コロナウイルス感染症の流行により、感染対策などの理由で入院中の患者さんはご家族との面会が制限されるなど、これまで当たり前のようにできていたことができなくなりました。悔しさや無力さを感じる一方で、自己への感染の不安もあり、ストレスが大きい日々を過ごしてきました。大変なこともありますが、嬉しいこともたくさんあります。患者さんとの関わりで笑顔や感謝の気持ちをいただいたり回復されていく姿をみると、看護の喜びややりがいを感じ、この職業を選択してよかったと思います。

みなさんもコロナ禍で大変だと思いますが、ともに頑張りましょう！

癒しの看護とは何かを追求する

済生会松阪総合病院勤務　１０回生　結城宏美

本校を卒業し後、済生会松阪総合病院へ就職し11年が経とうとしています。就職してからは、先輩や同期に助けてもらいながら現在も働き続けることができています。現代医療の変化とコロナ禍で様々な規制がある中で求められる対応方法などに悩みながらも、仲間とともに頑張っています。様々な制約のある中で「癒しの看護」とは何か？と日々考えながら看護を実践しています。また、令和５年４月から役職を受けさせていただくこととなり不安な毎日ですが、その役割とはどういうことなのかを日々模索しながら、先輩や同僚からアドバイスなどを受け今後も努力していきたいと思います。松阪看護専門学校で学んだ協働する相手を思いやること、患者さんの個別性に合った看護の実践を今後も忘れることなく取り組んでいきたいと思います。

手術室看護師として思うこと

松阪市民病院勤務　19 回生　木下桃果

私は看護師になって2年になります。新卒で手術室に配属されましたが、すぐの頃は慣れない環境に戸惑いと大きな不安を感じていました。先輩が手術に入る姿を見ていると、自分に出来るのだろうかとさらに不安になりました。基礎看護技術に加え、手術室では器械の名前や使い方、術式など新たに覚えることが多く、予習と復習の日々でした。同じ術式でも患者様の状態によって手術の進め方一つひとつが異なるため、予習をしていてもスムーズな対応ができず、悔しい思いをすることもありました。しかし、経験を重ねたことで少しずつではありますが、器械を予測して渡すことができるようになり自分の自信にも繋がりました。

また、手術室での基礎看護技術はバルーン挿入やサーフロー挿入など出来ることが限られているため、清拭やおむつ交換は病棟で経験させていただいたり、採血は先輩や医師の腕を借りて実際に練習をさせていただいたりしました。病棟勤務の看護師よりも経験できる回数が少ないため、看護技術が上達するよう積極的に実践するように心がけています。

２年目になり、器械出しだけでなく外回りの業務を行うことが増えてきました。全身麻酔下では、患者様が自ら苦痛や思いを訴えることができません。そのため、少しでも患者様が安全に手術を受けられるよう、個別性を考えた術中体位の固定などの看護が必要です。術前訪問やカルテから情報収集を行ない、患者様の思いを汲み取って一人ひとりに合った手術看護ができるよう、日々工夫し頑張っています。

私たち手術室看護師にとっては手術が日常生活の一部になっていますが、手術を受けられる患者様にとっては人生における大きな出来事です。入院期間の中で最も緊張され不安に感じるのは、身体的にも精神的にも手術日当日です。手術室看護師は患者様と関われる時間は少ないですが、患者様の人生の中で大切な瞬間に立ち会っていることを忘れずに、これからも一人ひとりに寄り添っていきたいです。